この脱中心化なるものは、たとえばある物理的な刺激が人に痛みを与えるという客観的な事実があるとしても、それがその人にとってどういう痛みとして感ぜられるのかという主観的な真実に対しては、決して言及することができないのである。この真実こそは、特定の個人にとってのみ、特定な意味をもつものだからである。この事情をまたピアジェは、「意識のあり方を分析してみると、本質的な点で物的状況とはちがうものがある。それは意識が必ずしも因果関係でつながっているのではない、ということである。意識のあり方は広義での含意関係であり、本質的に意味をあらわすものなのである」と述べている。すなわち、意味というものである以上、人それぞれに即して、意味あいが異なるのは当然のこととなるのである。それではこの人それぞれの主観的な真実を、私たちはどのようにしてわかるのだろうか。岡潔はこのわかるというあり方を、三つに分けて述べている。一つは知解というもの。これはいわゆる理屈がわかる。物事の筋道がわかる。物事の因果関係がわかるということである。楽曲分析や、楽曲を成立せしめた歴史的事象の理解などは、当然この範ちゅうのわかりであろう。ここのわかりというものは、評価、検証が容易であるために、今日の学校教育がこのわかりのみに終始し勝ちなのは、見られる通りのものである。二つは情解というもの。これは感覚的にわかる。からだでわかる。かたちがわかるということである。音楽の学習が、このからだでわかるというわかり方を要求するのは、音楽という存在が、本質的に人間の聴覚に直接かかわるからであり、言語化したり、記号化したりすることは、副次的な必要によるからである。この二つのわかり方は、私たちが日常体験しているところであって、ここでは便宜的に知解、情解と二つに分けて考えられているけれども、たとえば意味がわかる、意義がわかる（全体の中の個の位置がわかる意）という場合には、知解、情解が総合されているのであろう。さて三つは、私には述べる資格は当然ないのであるが、信解というものである。このわかりを、岡氏は他人の悲しみを自分の悲しみとするわかり方といい、佐藤氏は松籟の音がいいなあというわかり方であるというのである。仏教は私たち人間の心という不思議なものを、はっきりと観察しているのであるが、今、玉城康四郎氏の著に沿ってこのことを述べてみよう。まず私たちは、自然の事物とは別に心というものがあると考えている。そしてその心が自分というものだと思っている。しかし心というものは身体のように空間的な容量をもつものでは決してなく、ただ、意識しているという、一つの働らきがあるだけなのである。そして、その心の働きには、三つの不思議な性質がある。一つは、心は何にでもなるということである。青空を見ているときは青空そのままに、悲しい時には悲しさそのものになる。二つは、意識しようと意識しまいと、つねに働らき、活動しているということである。三つは、底の底まで澄みとおっている一点の曇りもない鏡のように、すべての事象を写しとるということである。しかし、この心の不思議な性質を邪魔し、枠づけるものが、私が、自分がという自我の観念なのである。そこで心の構造というものを、仮に実体的に考えてみるならば、一番表層のところに眼、耳、鼻、舌、身の五官を統一するところがあり、その下に自我の観念がある。そしてこの自我の観念の生まれる容れものをアラヤ識という。このアラヤ識というものは、現実に私たちの経験のすべてが蓄えられている蔵であり、また逆に私たちの現実経験は、すべてこの自分のアラヤ識の現われであり、自分という我の執着の源なのである。さてこそ私たちは、自分が聞き、自分がわかり、自分が感ずるという、自分と世界との対立、そのことによって起こる不安、淋しさから逃れることができないのである。このアラヤ識という心の深層から起こる自我の観念を、どのように静め、最も清らかな心の真のあり方に転ずるかは、もちろん宗教の課題である。しかし、音楽を聞くことによって、ある絶対的な感動が生まれるとするならば、これは宗教によってえられる世界に非常に近いものなのだろう。感動について、佐藤氏は次のことを指摘する。①いいなあという内的充足がある②そのかたちのあるがままをわかっている③何故いいかをあえて問わない場所において、人がお互に通じあっている④決してことばにはならない。人を否定したり、異同を立てようとは思わない⑤いい、わるいをいわない。また、人それぞれのわかりの内容が異なるとしても、あり方においては同一の場所にある⑥一人の人間の心の中に、世界はすべて含まれている。自にあらず、他にあらずの場所である。このように指摘されてみると、音楽的な感動とは、私たちが教えるということ、音楽するということ、生きるということすべての出発点であり、無限に近づくべき到達点であることに思い至った次第なのである。（完）

■来月号よりは、千代延尚先生（東京・浅草小教諭）をインタビュアーにむかえ、新しい「対話」シリーズが始まります。御期待ください。

（編集部）